

画像診断

画像診断のスペシャリストが **24 時間体制** で医療を支える

南郷 放射線診断専門医4名が在籍し、翌営業日まですべての所見を管理します。つまり、依頼医自身での診断とは別に、必ず私たち放射線科専門医も画像を診てレポートを

作成することで、依頼医・放射線科専門医の双方で見落としのない、より高い精度での画像診断を可能にしています。若い先生方には画像診断における教育的な役割も担っています。

さらには24時間体制で「遠隔画像診断」システムを導入。専門医それぞれがパソコンやタブレットを保有しており、病院とオンコールでつながっていますので、夜間当直の時間帯であっても専門医が診断レポートを書き、診療時間帯と同じレベルを担保しています。このように夜間まで対応している病院は稀で、

関連施設病院では当院だけだと思います。放射線診断専門医のレベルが病院のレベルを左右するとよくいわれますが、私たちはその言葉を肝に銘じ、臨床医のサポートを通して、地域の患者さんの命と生活を守るべく、心をひとつに業務に励んでいます。平川 この機会にご紹介したい[VSRAD]は、アルツハイマー型認知症の原因である脳の萎縮を調べるMRI検査です。早期発見・治療に結びつけるという観点から有益性があり、アルツハイマー型認知症が気になる患者さんには、ぜひおすすめしたい検査です。



放射線治療

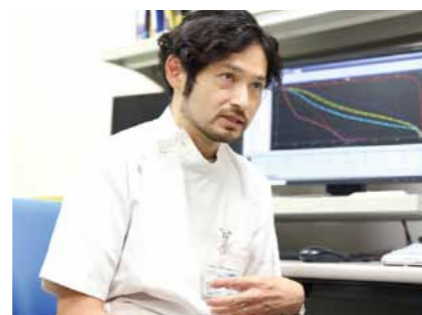
放射線治療の**効用**を**周知**し地域医療へさらなる**貢献**を

荻野 地域がん診療連携拠点病院、また南河内エリアで放射線治療設備を完備している2病院のうちのひとつとして、広く地域の患者さんに対し、年間200から215例のがん治療を行っています。放射線治療には根治照射と緩和照射のあることはご存じのとおりですが、実はまだまだ周知されていないと感じることがあります。たとえば、高齢者や根治的治療の難しい胃がんの患者さんで、出血のある場合は放射線治療が非常に有効です。しかしながら輸血を繰り返されていたり内視鏡での止血手術をされているケースが多いのではないかと思います。この

ように意外に知られていない放射線治療の適応やメリットもありますので、登録医の先生方には、診療科や地域連携室などを通じてご相談をいただければと思います。

トピックとしては、早期の肺がんで効果が期待されている体幹部定位放射線治療が、2020年4月より、オリゴ転移や脊椎転移、すい臓がんに対しても保険適用となりました。腫瘍に対して大線量を少ない回数でピンポイントに照射することで従来の放射線治療と比べると治療期間が大幅に短縮され、手術に匹敵する局所効果が期待できると同時に副作用の少ないことが特徴です。

保険適用以降、当院でも積極的に実施していますし、少ない回数での治療はコロナ禍においても推奨されています。



がんと向き合う**患者さん・ご家族**、そして臨床の現場を全力でサポート



【緩和ケアサポートチームの動画はこちら】

緩和ケアセンター部長
緩和ケア推進室長・泌尿器科長

うえじま
上島 成也

しげや
がん看護専門看護師

こばやし
くき
小林 久希

患者さん一人一人が**主役** **在宅医療支援**も積極的に

上島 緩和ケアサポートチームは、身体症状・精神症状の専門医、看護師、薬剤師、臨床心理士、管理栄養士、理学療法士、医療ソーシャルワーカーがチームを組み、主治医・病棟看護師と連携して、患者さんとご家族の苦痛を緩和すべく、全力を尽くしています。特徴のひとつは、歯科の先生もチームの一員として毎週のカンファレンスに参加していただき、口腔ケアを推進していることです。

ドラマでいえば患者さんとご家族が主役、我々はあらゆる方面から主役をサポートするスタッフになります。私はチームリーダーではありますが、現場ではそれぞれがリーダーです。そしてロー、セカンド、サードとギアチェンジしながら、患者さんが患者さんなりのトップギアで安定した生活ができるよう支援したいと考えています。水曜日・木曜日には「緩和ケア外来」も設けており、そうした患者さんに対する直接的な緩和医療ももちろんですが、その前提として、各診療科の先生方も緩和医療の知識をお持ちですので、そこをさらに私たちや専門看護師・認定看護師がサポートし、必要に応じて助言



や提案を行い、医療従事者のストレスをも緩和することを大切にしています。

さらに今、在宅医療が推進されていますが、それを不安に思われる患者さん達によくお話することがあり、この機会に在宅診療をしてくださる先生や看護師さんにもお伝えしたいと思います。それは、病院のスタッフステーションが地域というなら診療所、病室がご自宅、廊下は道路で、道路には薬局や訪問ステーションやリハビリ施設等があり、地域を病院と見なせばできることはたくさんあるということです。もし在宅医療が難しくなれば、必ず当院がバックアップしますし、ホスピスや療養施設などの方向性もお示しできます。地域で助け合い、地域に根付いた緩和医療をぜひ推進していきましょう。

本当に**必要なサポート**を提供するために

小林 チームの中で、看護師は患者さんに最も近い存在です。がん治療の副作用やバッドニュースを受けたときの心理的落ち込みなどの情報もたらされたら、まずは患者さんから話を伺い、病棟や外来の看護師、主治医など関係する職種と情報共有をして、問題点を整理。必要なサポートについて考え、各職種につないでいくという役割が、非常に重要と考えています。さらにはがん以外の疾患における緩和医療についても、各職種のメンバーとともに勉強し、幅広く、きめ細かなケアやサポートで、患者さんの今に寄り添いたいと思っています。

